「祈りと農」レジュメ

平成24年3月17日

はれプロ＠晴佐久

　農民にとって「水」は欠くことができず、古くは水上様とも言われるように信仰の対象として、近世では命をかけて争うほど貴重な資源として、その重要性はいつの世でも変わらない。

　湖北の観音像は、小説家井上靖の「星と祭」で有名となり、その一節に「信仰というものは、それに縋って生きようというものではなく、ただ愛情深く奉仕し、敬愛の心をもって守っている」と表現されている。

１．農業用水の役割

　集落内を流れる水路は、農業用水だけではなく種々の機能（地域用水機能）を有する。

* + 暮らしの場　　　・・・　洗い場、防火用水、消雪水
	+ 遊び・学びの場　・・・　せせらぎ、魚とり、生物観察
	+ 安らぎの場　　　・・・　景観、生物の棲家
	+ 交流の場　　　　・・・　植栽、ウォーキング

２．湖北の祈りと農

　湖北地域　…　滋賀県、琵琶湖の北東部

　『条里制水田』　　→　平安時代からほとんど姿を変えず存在

『十一面観音の里』→　戦火の中、命を賭して守り抜いた存在

　　　　　　　　　　　起源「血の中を流れる諸々の悪を滅して菩薩の位に至った」

『おこないさん』　→　毎年冬、集落ごとに行われる神事

　　　　　　　　　　　　　【昔】仏教行事　　【今】五穀豊穣を祈る祭り

３．農耕の歴史

　・はじまり　・・・　朝鮮人が対馬海流で越前に辿り着き平地を求め湖北平野に移住

　　　　　　　　　　　→　日本最古の羽衣伝説（余呉湖の伊香具神社）

　・定　　着　・・・　広大な平野、適度な日照、洪水が少ない、

**琵琶湖の水運**、**砂鉄の産地**

　・水田開発　・・・　平安中期の水田面積は全国随一（大和の２倍、尾張の５倍）

　　　　　　　　　　　見事な条里制水田（地名に一の坪・五坪・十里・七条など）

＜水田開発の矛盾＞

・水不足　・・・○新田開発は当時の土木技術でも可能だが用水の手当ては不十分

　　　　　　　　　　河川から安定的な水量を得るには水田面積の20倍の流域面積が必要

　　　　　　　　　　製鉄に伴う山林からの土砂流出による**天井川**の形成と**瀬切れ**の発生

　　　　　　　　　　「鉄一升に薪二俵」（鉄塊2tonに対し、砂鉄24ton木炭28ton必要）

　　　　　　　　　○過度な採掘と伐採により、周辺の山々は禿山へと変貌。

　　　　　　　　　　【天井川】下流ほど河床が高くなり洪水が起きやすくなる

　　　　　　　　　　【瀬切れ】砂礫層の河床で夏に日照りが続くと水が流れなくなる

　・水争い　・・・○慢性的な水不足に加え、時の権力者による堰取水の変更

　　　　　　　　　　浅井久政の書状「飢水になり迷惑の時は水まかし到さるべく候」

　　　　　　　　　　－渇水の甚だしい場合（飲料水不足）は堰を破壊することを許可

　　　　　　　　　　【餅の井落し】四百年にわたる水争いの発端（昭和１５年迄続く）

　　　　　　　　　　（原因）浅井氏の滅亡、徳川家康の餅の井の権利を認める裁定

　　　　　　　　　　（解決）昭和１７年高時川合同井堰の完成

４．仏教の変遷

　『仏教文化』→　中央仏教×白山信仰×比叡山＝　観音信仰

　　　渡岸寺・法華寺・石道寺（十一面観世音菩薩像）・観音寺（木造十一面観音立像）・高尾寺・安楽寺・鶏足寺（十一面観音菩薩立像）・飯福寺・円満寺

『十一面観音像』　 →　頭に阿弥陀如来、左手に水瓶を持っている。

　　正３面：慈悲面、右３面：瞋怒、左３面：牙上出面、裏１面：暴悪大笑面

〇現世の苦難を救済すると言われる**観音菩薩**は、戦乱や飢餓に苦しむ農民の信仰の対象。

→　近江は交通の要衝の地であり、戦乱の舞台（姉川・小谷城攻め・賤ヶ岳）

→　戦乱中に何度も本堂が焼かれたが、その度村人が観音像を運び出し守ってきた。

〇近世になり、農業基盤が造成されたことで農業用水を欠くことがなくなり、

農民にとって『水への信仰』が自然と『菩薩への信仰』へと継承された。

５．まとめにかえて

本日のテーマ「祈りと農」という観点から話題提供。

【祈りの対象物】　　　　　　　　　【祈りの事象】

　・鎮守の森（南方 熊楠）　　　　　・新嘗祭（天皇が農作物の収穫に感謝する式典）

　・田畑の畦畔木　　　　　　　　　 ・お水取り（東大寺）

　・水上様　　　　　　　　　　　　 ・水乞い

※引用文献　　農林水産省近畿農政局監修「湖北の祈りと農」

近畿農政局：http://www.maff.go.jp/kinki/seibi/sekei/kokuei/kohoku/pamphlet.html